

第5回アドバイザー会議開催に先立つ委員への個別事前説明 主な意見

第5回アドバイザー会議の開催に先立ち、前回までの会議における委員の意見への対応及び理念の見直し、今後の取組について、別添資料2-2により、委員への個別説明を行った。主な意見は以下のとおり。

【「7つのC」について】

- SDGs、サステナビリティ、ダイバーシティ、レジリエンスといったグローバルなキーワードと関連し合うようにできれば深みが出るのではないかな。
- 千葉特有の言葉を残した方が良く、最初に Chiba が来ても良いのではないかな。Civic や Collection は大切。コラボレーション (Collaboration) なども候補に入るのではないかな。
- Challenge や Civic や Connect など、中身が分からないと何とも言えないため、具体的な計画を前面に掲げ柱にし、そこに抽象的な目標がぶら下がっている構造の方が伝わりやすいのではないかな。
- 「7つのC」は、名詞と動詞、動詞であれば主語は誰か、といったところで統一感がなく、おさまりが悪いのではないかな。
- 「Civic」「Connect」「Communicate」「Center」は全て普及関係であり、多いのではないかな。
- 「C」の他の候補として、「Countercharge 逆襲する」「Collaboration コラボレーション」「Colleague 仲間 (県民全体を Colleague とする)」「Collective 集団の」「Correspondance 調和」「Crew 乗組員 (Colleague と同様、県民全体を Crew とする。)」 「Criterial 判断批評の基準」「Crossroad 交差点」「Cultivate 耕す、育てる」「Cutaway 断面が見えるようにした模型」などがある。

【千葉の独自性について】

- 都会の先進性を、千葉は安定した農業などある意味で支えている。都会の危うさを安定した豊かな生産力で支えてるところが千葉の良いところではないかな。
- 伊能忠敬のような人が商家から出て来ており、伝統的にシビックなところがある。「Civic」はいろいろな形で強調して良いのではないかな。
- 浅井忠コレクションはストーリーを作って広めていくと手応えが出てくるのではないかな。出身、ゆかりというのでなく、「浅井忠に息づいているのは千葉県民のソウル」のような話。

- 近代美術にとって房総が重要だということは、一般にはほぼ知られていない。今まで以上にやっていただきたい。
- サーフィン、キャンプやゴルフする人は千葉に親しみがある。美術に限らず、うまく繋がれると良い。

【浅井忠とデザインについて】

- 浅井忠は、画家であると同時に図案家で、デザインにも関わっている。また、千葉県の中では、松戸市博や千葉工業大、千葉大など、デザインに力を入れているところがある。2023年には世界デザイン会議（World Design Organization）が千葉大学をメイン会場に行われる。千葉ならではの美術館としてのデザインの関わり方というのは面白いものになるのではないか。

【展覧会計画について】

- 中長期的な観点から、シリーズ化や2年に1度、3年に1度というパターンなのか、「こういう展覧会を開催していく」というものがあると分かりやすい。
- 一つ一つの企画展が中長期的な目標の実現のための布石となっていくような形で計画を立てられると良い。

【その他】

- モデル、目標を想定しておく必要はある。成り立ち、コレクション、扱っている地域性、歴史などで近いところで目に見えるような形のモデルを想定しておくが良い。
- 県民にアピールするのであれば、「こういう施設をここに作り10年後にはこういう姿になる」という鳥瞰図のようなものが分かりやすく伝わりやすい。
- コレクションを軸に据えるのであれば、修復専門家が館内に常駐しているべきである。修復家が内部にすることで、コレクションを日常的に手入れすることができ、情報が集まり、研究の質が変わってくる。
- ポートパークとの連絡通路について、アーティストとのコラボレーション的なものを視野に入れ、一種芸術的な体験として、美術館周囲の空間をどう感性豊かなものにしていくのか、小さなプロジェクトとしてさまざまに構想してみるのが良い。